１０

ある日突然、週刊誌などで「ＯＫファンド」バッシングが始まった。それと呼応するように靖の会社の社員が１人２人と辞めていった。

　「ＯＫファンド」の業績が余りにも良すぎるので妬みヤッカミもあっての事なのだろうが、「インサイダー取引」などの不正があるのではないかと記事は追求していた。過去に「儲けて何が悪い」と居直った社長もいたが、靖は飽くまでも低姿勢で嵐が通り過ぎるのを待とうと考えていた。

　しかし「ＯＫファンド」叩きは一向に収まらず、頼みの社員も次々と引き抜かれ去って行ってしまった。ついには最初に会社を立ち上げた時の２人の社員が残るだけになってしまった。万事休すか。それとも営業規模を一挙に小さくして再出発するか。靖は岐路に立たされた。出る杭は打たれるではないが、つくずく恐いと思った。

　確かに自分のやってる実態は“インサイダー”と言われても仕方の無いことだった。今のところ“彼女”は全く知られていないから、追求されても絶対に証拠は無いはずだ。そこだけが最後の砦といってもよかった。そのくらいにまで靖は追い詰められた思いだった。どうしようかと考えが右往左往するだけだった。

“彼女”からの思念はやってこなかった。

　そんな時、ふと靖は由紀さんとの食事のことを忘れていたのを思い出した。由紀さんも一大事が持ち上がった靖への電話を控えていた。靖は由紀さんに全ての事を話してみようかと考えた。マスコミにいる人の考えから何か助言でももらえないかと思った。俄か社長の靖の甘さでもあった。しかし相談相手として考えられるのも由紀さんしかいないような気がした。

　相談してどういう反応があるか、それによって自分はどうするか。でも考えてみれば今の“社長”という立場も“棚ぼた”でなったようなものだった。自分の力など全く無いに等しい。会社を大きくして社会還元云々まで考えていたが、大それた事だったのかもしれない。自分の実態はやはりシガナイ会社員が似合ってる。でも・・・、美味しい生活をしてしまった今、勤め人に戻れるのか・・・。

　考えは堂々巡りしているだけで、一層不安が増してきた。誰かに頼りたくなってくるのを禁じえなかった。

　靖は由紀さんに電話を入れることにした。しかしここからまた運命が大きく動き出すのをまだ靖は知る由も無かった。

１１

レストランの個室で靖と由紀は向かい合っていた。

「今日は来てくれてありがとう」と靖は生真面目に頭を下げた。

「うーん、そんな堅い挨拶されたら困っちゃうわ・・・」

「あ、ごめんなさい。そうだよね、楽しく食事をするために来てもらったんだものね」

「そうよ、大変な時なのだからせめて食事の時くらいはその事は忘れた方がいいのじゃない」由紀の思いやりで答えた。

「ありがとう、そう言ってもらうだけで嬉しいよ。まずは美味しいもので気分転換しようかなあ。じゃあ、いただきましょうか」と言うと由紀も前菜からいただき始めた。

「美味しいね」「そうね」とコース料理に舌鼓を打ちながらゆっくりと食べた。

１時間くらいかけてデザートまで食べ終わった。

「こんなゆっくりと時間が流れるのを感じたのは久し振りだよ」と靖は最近追い立てられてた自分を振り返るように言った。

「ここでリフレッシュできればいいのにね。私は単純だから美味しいものを食べて凄い気分転換になったわ」と良い香りのコーヒーを飲みながら応じた。

「そう、良かった。由紀さんのその気持ちがこっちにまで伝わってくるようだよ。そのリフレッシュされた由紀さんに少し相談があるんだよ」と軽い感じで話した。そのほうが由紀さんも答えやすいと思った。

「そう、難しい事じゃあなければ元占い師さんの相談に乗ってあげてもいいわよ」とおどけて言った。

「いやー、やられたなあ。元占い師は大した事ないねえ」

「現役マスコミの意見を述べさせていたたくわ」と笑いながら応じた。

「じゃあひとつお願いします。実は宇宙人のことなんだけど・・・」と言ってみた。

「げ、何かと思えば宇宙人・・・。って、まさか最初の切っ掛けのあの変な人生相談の手紙の話になるの？」

靖は真顔で頷いた。そして話し出した。

「今、知っての通りインサイダー疑惑で叩かれてるけれど、法律違反は絶対無い。でも実態はその宇宙人からの電波情報を入手してのファンド商品を作ってるのさ。だから“彼女”が表に出ない限り証拠は絶対に見つからない・・・。とは言え“インサイダー”情報を手に入れている事には変わりないから、このタイミングで会社を畳んだほうが良い様な気もして。でも逆にこのタイミングだと疑われてるのを肯定するようなものだし・・・」

真剣に話してる靖を由紀は狐につままれたような感覚で聞いていた。

靖がまた話し出した。

「自分の考えがグルグル回ってるだけで、どうにしたら良いのか踏ん切りがつかないのさ」

由紀は困惑した顔でどこから聞いたら良いのか考えあぐねていた。

「・・・うーん、そうねえ・・・。俄かには信じがたいことだけど“宇宙人”がいるって事を前提にしないといけないってことになるわよね」

「うん、そうなんだよ。最初に投書した内容は本当だったんさ。でも途中から上手くすれば俺の人生が変えられるかもと気付いて、ノイローゼで幻聴だったなんて誤魔化したんだよ。で、その後は占い師で一山当てて次は株でさらに大きくなって“社長”にまで成ってしまったわけなんだけど・・・」

「そんな事って・・・」由紀は今夜の会食の楽しさがどこかへ吹っ飛んでしまったように感じていた。バッシングされてる靖を当然励まそうと思ってやってきた。それが飛んだ方向へ話が行ってしまった。

「まあ靖さんのことを見てきた私としては確かに冷静に考えれば、有り得ない出世の仕方だったともいえる・・・」

「実際、棚ぼたでお金儲けをして有名になってしまったんだ」だんだんと声に力が無くなってきた。

「ずるい事を考えればこのままその“彼女”を隠しておけば今まで通りのことも出来るけれど、でもそれ以前にやはり私としては本当にそんな“宇宙人”がいるのか確かめないと答えようがないのよ」

「そうだよね。事実に基づいて判断しないと、新聞記者として失格だよね。あ、ゴメン。深い意味はないからね」

「美味しい料理をご馳走してもらってホント嬉しいのだけれど、それとこれとは別だわね。一度その“宇宙人の彼女”に会わせてくれない？」

「そうだよね、分かった。じゃあ今は会社も開店休業中だから、良かったら明日でもいいけど」